

イザヤ 59 章 9-19 節

ヘブル人への手紙 5 章 12-6 章 2、9-12 節

マルコによる福音書 10 章 46-52 節

本日は、バザーです。わたしたちの教会の交わりが、どのようなものであるかを、伝える機会となればと思います。

本日の福音書は、目が不自由であったバルティマイが、イエス様に目を癒していただくお話です。場所は、「一行はエリコに来た」とありますので、エリコです。エリコは、旧約聖書にも登場する、世界史的に見てもかなり古い町の一つです。そこでの滞在の様子は描かれていません。「イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出られると」と、そのエリコを出て行こうとしたときに、お話が始まります。そして、「ティマイの子で、バルティマイという盲人が道端に座って物乞いをしていた」（マルコ 10:46）とバルティマイが登場します。

バルティマイは、「ナザレのイエスだと聞くと、『ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください』と叫び始めた」のです。目が不自由な彼は、イエスがどこにいるのかわからないので、とにかく叫んだのでしょう。また、イエス様が癒しなどの奇跡を起こす方であることは、すでにうわさなどを聞いてわかっていたのでしょう。

「憐れんでください」、その叫びの言葉は、わたしたちが礼拝で唱える「キリエ・エレイソン」の起源と言われます。その叫びの中にある「憐れむ」は、イエス様が既定の病を患った人や、五千人の食事で群衆を深く憐れんだ「深く憐れむ」とは異なり、安定している状態の人が、そうではない人に対するあわれみです。バルティマイは、人間として、主なる神様の側であるイエス様に対して、自分を低くしてお願いしているのです。

そのようなバルティマイの叫びに対して、弟子たちをはじめとした周囲の人たちの反応は、冷たいものでした。「多くの人々が叱りつけて黙らせようとした」のです。多くの人々が、なぜ必死に叫ぶバルティマイを黙らせようとしたのかは語られていません。それは読者の想像に任されています。ただし、容易に想像できることは、イエス様は、エルサレムに向かう大切な旅に出るところである、物乞いにかまっている暇はないということです。しかし、バルティマイは、「ますます、『ダビデの子よ、私を憐れんでください』と叫び続けた」（マルコ 10:48）のでした。彼はあきらめなかったのです。

イエス様はバルティマイの叫びに応え、弟子たちを通して、バルティマイを呼ばせました。「盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」（マルコ 10:50）という描写は、彼がどれほど喜んだかを示しています。そして奇跡が起こるのですが、それゆえにこのお話は、いわゆる奇跡物語の一つです。また、単に奇跡を超えて、目を癒されたバルティマイは、「なお道

を進まれるイエスに従った」と報告され、マルコ福音書という物語世界からいなくなります。この「従う」という言葉は、弟子たちに用いられた言葉です。弟子たちに以外にも（弟子たちよりも立派に）イエス様に従った人がいた、そのことを告げているといえるのです。

このお話はいろいろと注目すべき点がありますが、本日は、このバルティマイの叫びに対するイエス様の反応から学びたいと思います。イエス様が、彼を呼び寄せ、「何をしてほしいのか」（マルコ 10：51）と問いかけたことです。目が不自由な人が、「憐れんでください」と叫んでいる。当然、目を治してほしいのだろうと推測することはできます。しかし、イエス様はそう決めつけずに、バルティマイに尋ねるのです。つまり、何を欲しているのかを聞いてくださるといえることです。

わたしたちは、主なる神様が、わたしたちのことを何でも知ってくださっている、良い方向へと導いてくださっていると信じています。そのような信仰は大切です。しかし、わたしたちは、主なる神様に何かを求める、願うからこそ、大切かを自分で悟る場合もあります。それは、祈ることにおいても起こります。主なる神様に求めるからこそ、自分たちが本当に何を望んでいるか、さらには何がもっとも大切なのかを知ることができるということです。

バルティマイの望みは、ある意味で予想通り、「見えるようになる」ことでした。その望みに対して、イエス様はただ「**行きなさい。あなたの信仰があなたを救った**」（マルコ 10：52）と言葉だけで奇跡を起こします。ほかの奇跡（マルコ 7：31-37、8：22-26）のように、何の所作もしないのでした。シリア・フェニキアの女性の時と同じように、求める人の信仰だけで奇跡が起きたのでした（マルコ 7：24-30）。イエス様はバルティマイが、何もかも捨てて、イエス様を通して主なる神様に信頼する信仰を見出したのでしょ

う。わたしたち聖公会は、あまり自覚しませんが、祈る教会と呼ばれることがあります。わたしたちの礼拝には代祷がありますが、そのような祈りがあるのがわたしたちの教会の特徴です。祈ることの目的は、いろいろありますが、その一つに、主なる神様に何かを求めるということがあります。それは、いわゆる一般的な宗教的な行為の一つといえますが、礼拝における祈りは、バルティマイに尋ねるイエス様のように、わたしたちに対して「何を望んでいるのか」という問いに、わたしたちが答えることにほかなりません。その意味で、代祷は、ほかの祈りと同じように何を望んでも構わないのですが、同時にわたしたちが真剣に何を望んでいるかが、明らかになる時でもあります。

わたしたちは、イエス様のように奇跡を起こすことはできませんが、世界中で起こっている悲しい出来事、それらが解決するために、祈り続けることはできます。たとえ遠く離れた地域の事柄でも、ある教会が覚えていて祈ってくれている、それだけでも支えになる場合もあります。それが主なる神様に呼ばれ、教会に集められたわたしたち第一にすべき事柄です。これからも、わたしたちの祈りが、具体的な形になることを願いつつ、毎週の礼拝を大切にしたいと思えます。